

綠蔭叢書第一壹篇

小說  
破戒

島崎藤村著

破

戒

この書の世に出づるにいたりたるは、函館にある  
秦慶治氏、及び信濃に在る神津猛氏のたまものな  
り。勞作終るの時にあたり、このものがたりを  
二人の恩人のまへにさしぐ。

不許複製

明治三十九年三月二十日印刷  
明治三十九年三月廿五日發行

著作兼  
發行人

島崎春樹

東京府豐多摩郡大久保村  
字西大久保四百五番地

發賣元

上田屋

東京市神田區裏神保町  
一番地

印刷者

石川金太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地  
株式會社秀英舍  
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

定價金七拾錢

(郵稅金八錢)

破やぶ戒かい

藤

村

## 第 壹 章

## (一)

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に轉宿を思ひ立つて、借りることにした。部屋といふのは、其藏裏つゞきにある二階の角のところ。寺は信州下水内郡飯山町二十何ヶ寺の一つ、眞宗に附屬する古刹で、丁度其二階の窓に倚凭つて眺めると、銀杏の大木を経て、飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の佛教の地、古代を眼前に見るやうな小都會、奇異な北國風の屋造、板葺の屋根、または冬の雪除として使用する特別の軒庇から、ところ／＼に高く顯れた寺院と樹木の梢

## 破

まで——すべて舊めかしい町の光景が香の烟の中に包まれて見える。たゞ一際目立つて此窓から望まれるものと言へば、現に丑松が奉職して居る其小學校の白く塗つた建築物であつた。

## 戒

丑松が轉宿を思ひ立つたのは、實は甚だ不快に感ずることが今の下宿に起つたからで。尤も賄でも安くなければ、誰も斯様な部屋に満足するものは無からう。壁は壁紙で張りつめて、それが煤けて茶色になつて居た。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、何となく世離れた、静寂な僧坊であつた。それがまた小學教師といふ丑松の今の境遇に映つて、妙に佻しい感想を起させもする。

今の下宿には斯ういふ事が起つた。半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て來た大日向といふ大盡、飯山病院へ入院の爲とあつて、暫時腰掛に泊つて居たことがある。入院は間もなくであつた。もとより内證はよし、病室は

第一等、看護婦の肩に懸つて長い廊下を往つたり來たりするうちには、自然と豪奢が人の目にもついて、誰が嫉妬で噂するともなく、『彼は穢多だ』といふことになつた。忽ち多くの病室へ傳つて、患者は總立。『放逐して丁へ、今直ぐ、それが出來ないとあらば吾儕擧つて御免を蒙る』と腕捲りして院長を脅すといふ騷動。いかに金盡でも、この人種の偏執には勝たれない。ある日の暮、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠は其儘もとの下宿へ舁ぎ込まれて、院長は毎日のやうに來て診察する。さあ今度は下宿のものが承知しない。丁度丑松が一日の勤務を終つて、疲れて宿へ歸つた時は、一同『主婦を出せ』と喚き立てるところ。『不淨だ、不淨だ』の罵詈は無遠慮な客の口唇を衝いて出た。『不淨だとは何だ』と丑松は心に憤つて、蔭ながらあの大日向の不幸を憐むだり、道理のないこの非人扱ひを慨いたりして、穢多の種族の悲惨な運命を思ひつゝけた――丑松もまた穢多なのである。

## 破

見たところ丑松は純粹な北部の信州人——佐久小縣あたりの岩石の間に成長した壯年の一人とは誰の目にも受取れる。正教員といふ格につけられて、學力優等の卒業生として、長野の師範校を出たのは丁度二十二の年齢の春。社會へ突出される、直に丑松はこの飯山へ來た。それから足掛三年目の今日、丑松はたゞ熱心な青年教師として、飯山の町の人に知られて居るのみで、實際機多である、新平民であるといふことは、誰一人として知るものが無かつたのである。

## 戒

『では、いつ引越してゐらつしやいますか。』と聲をかけて、入つて來たのは蓮華寺の住職の匹偶。年の頃五十前後。茶色小紋の羽織を着て、精せた白い手に珠數を持ち乍ら、丑松の前に立つた。土地の習慣から『奥様』と尊敬められて居る斯の有髪の尼は、昔者として多少教育もあり、都會の生活も萬更知らないでも無いらしい口の利き振であつた。世話好きな性質を額にあらはして、微な聲で口癖のやうに念佛して、對手の返事を待つて居る

## 破

様子。

其時、丑松も考へた。明日にも、今夜にも、と言ひたい場合ではあるが、さて差當つて引越しするだけの金が無かつた。實際持合せは四十錢しかなかつた。四十錢で引越しの出来やう筈も無い。今の下宿の拂ひもしなければならぬ。月給は明後日でなければ渡らないとすると、否でも應でも其迄待つより外はなかつた。

『斯うしませう、明後日の午後といふことにしませう。』

『明後日?』と奥様は不思議さうに對手の顔を眺めた。

『明後日引越すのは其様に可笑いでせうか。』丑松の眼は急に輝いたのである。

『あれ——でも明後日は二十八日ぢやありませんか。別に可笑いといふことは御座ませんがね、私はまた月が變つてから來つしやるかと思ひましてサ。』

『む、これはおぼきに左様でしたなあ。實は私も急に引越しを思ひ立つたものですから。』

## 戒

## 破

と何氣なく言消して、丑松は故意と話頭を變へて了つた。下宿の出来事は烈しく腕の中を騒がせる。それを聞かれたり、話したりすることは、何となく心に恐しい。何か穢多に關したことになる、毎時もそれを避けるやうにするのが是男の癖である。

『なむあみだぶ。』

と口の中で唱へて、奥様は別に深く堀つて聞かうとしなかつた。

## 戒

## (二)

蓮華寺を出たのは五時であつた。學校の日課を終ると、直ぐ其足で出掛けたので、丑松はまだ勤務の儘の服裝で居る。白墨と塵埃とで汚れた着古しの洋服、書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱へて、それに下駄穿、腰辨當。多くの勞働者が

人中で感ずるやうな羞恥——そんな思を胸に浮べ乍ら、鷹匠町の下宿の方へ歸つて行つた。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群つて居た。中には立ちどまつて丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそ／＼立話をして居るものもある。『彼處へ行くのは、ありやあ何だ——む、教員か』と言つたやうな顔付をして、酷しい輕蔑の色を顯して居るものもあつた。是が自分等の預つて居る生徒の父兄であるかと考へると、淺猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になつてすた／＼歩き初めた。

本町の雜誌屋は近頃出來た店。其前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くやうに張出してあつた。かねて新聞の廣告で見て、出版の日を樂みにして居た『識悔録』——肩に猪子蓮太郎氏著、定價までも書添へた廣告が目につく。立ちどまつて、其人の名を思出してさへ、丑松はもう胸の踊るやうな心地がしたのである。見れば二三の青年が店頭に立つて、何か新しい雜誌でも獵つて居るらしい。丑松

## 破

## 戒

は色の褪せたズボンの袖囊の内へ手をつ突込んで、人知れず銀貨を鳴らして見ながら、幾度か其雜誌屋の前を往つたり來たりした。兎に角、四十錢あれば本が手に入る。しかし其を今茲で買つて了へば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。轉宿の用意もしなければならぬ。斯ういふ思想に制せられて、一旦は往きかけて見たやうなもの、やがて復た引返した。ぬつと暖簾を潜つて入つて、手に取つて見ると――それはすこし臭氣のするやうな、粗惡な洋紙に印刷した、黄色い表紙に『讖悔錄』としてある本。貧しい人の手にも觸れさせたいといふ趣意から、わざと質素な軀裁を擇むだのは、是書の性質をよく表して居る。あゝ、多くの青年が讀んで知るといふ今の世の中に、飽くことを知らない丑松のやうな年頃で、どうして讀まず知らずに居ることが出來やう。智識は一種の饑渴である。到頭四十錢を取出して、欲いと思ふ其本を買求めた。なけなしの金とはいひ乍ら、精神の慾には替へられなかつたのである。

『懺悔録』を抱いて――買つて反つて丑松は氣の衰頹を感じ乍ら、下宿をさして歸つて行くと、不圖、途中で學校の仲間に逢つた。一人は土屋銀之助と言つて、師範校時代からの同窓の友。一人は未だ極く年若な、此頃準教員に成つたばかりの男。散歩とは二人のぶら／＼やつて來る様子でも知れた。

『瀬川君、大層遅いぢやないか。』

と銀之助は洋杖を鳴し乍ら近いた。

正直で、しかも友達思ひの銀之助は、直に丑松の顔色を見て取つた。深く澄むだ目付は以前の快活な色を失つて、ふに言はれぬ不安の光を帯びて居たのである。『あゝ、必定身軀の具合でも悪いのだらう』と銀之助は心に考へて、丑松から下宿を探しに行つた話を聞いた。

『下宿を？君はよく下宿を取替へる人だねえ――此頃あそこの家へ引越したばかりぢやないか。』

と毒の無い調子で、さも心から出たやうに笑つた。其時丑松の持つて居る本が目についたので、銀之助は洋杖を小脇に挟むで、見せろといふ言葉と一緒に右の手を差出した。

『是かね。』と丑松は微笑みながら出して見せる。

『む、』「懺悔録」か。』と準教員も銀之助の傍に倚添ひながら眺めた。

『相變らず君は猪子先生のものが好きだ。』斯う銀之助は言つて、黄色い本の表紙を眺めたり、一寸内部を開けて見たりして、『さうく新聞の廣告にもあつたツけ——へえ、斯様な本かい——』斯様な質素な本かい。まあ君のは愛讀を通り越して崇拜の方だ。はい、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。嘸かしまた聞かせられることだらうなあ。』

『馬鹿言ひたまへ。』

と丑松も笑つて其本を受取つた。

戒

破

## 破

夕靄の群は低く集つて来て、あそこでも、こゝでも、最早ちら／＼灯が點く。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すといふ話をして、この友達と別れたが、やがて少許行つて振返つて見ると、銀之助は往來の片隅に佇立むだ儘、熟と是方を見送つて居た。半町ばかり行つて復た振返つて見ると、未だ友達は同じところに佇立ひて居るらしい。夕餐の煙は町の空を籠めて、悄然とした友達の姿も黄昏れて見えたのである。

## 戒

### (三)

鷹匠町の下宿近く來た頃には、鉦の聲が遠近の空に響き渡つた。寺々の宵の勤行は始つたのであらう。丁度下宿の前まで來ると、あたりを警める人足の聲も聞えて、提灯の光に宵闇の道を照し乍ら、一挺の籠が昇がれて出るところであつた。

## 破

## 戒

あゝ、大盡たいじんが忍しのんで出るでのであらう、と丑松うしまつは憐あはれむて、默然もくねんとして其處そこに突立つたつて見て居ゐるうちに、いよゝゝ其それとは附添つきそひの男おとこで知しれた。同おなじ宿やどに居ゐたとは言いひ乍ながら、ついぞ丑松うしまつは大日向おほひなたを見みかけたことが無い。唯附添ただつきそひの男をとこばかりは、よく藥くすりの罫びなどを提さげて、出でたり入はいつたりするところを見みかけたのである。その雲くもを突つくやうな大男おほおとこが、今いま、尻端しりはし折をりて、主人しゆじんを保護ほごしたり、人足にんそくを指圖さしづしたりする甲斐かひ々々くぐしさの穢多みだの中なかでも卑賤いやしい身分みぶんのものと見みえ、其處そこに立たつて居ゐる丑松うしまつを同おなじ種族やからとは夢ゆめにも知しらないで、妙めづに人ひとを憚はかるやうな様子やうすして、一寸會釋ちやうとくわいし乍ながら側わきを通とほりぬけた。門口かどぐちに主婦かみさん、『御機嫌ごきげんよう』の聲こゑも聞きこえる。見みれば下宿げしゆくの内うちは何なんとなく騒々さうぐしい。人々ひと々は激昂げきかうしたり、慨憤げふんしたりして、いづれも聞きこえよがしに罵ののつて居ゐる。

難有ありがたうぞんじます——そんなら御氣おきをつけなすつて。』  
とまた主婦かみさんは籠かごの側わきへ駈寄かけよつて言いつた。籠かごの内うちの人ひとは何なんとも答こたへなかつた。丑松うしまつ

は黙つて立つた。見る／＼昇がれて出たのである。

『ごまあ見やがれ。』

これが下宿の人々の最後に揚げた凱歌であつた。

丑松がすこし蒼ざめた顔をして、下宿の軒を潜つて入つた時は、未だ人々が長い廊下に群つて居た。いづれも感情を制へきれないといふ風で、肩を怒らして歩くもあり、板の間を踏み鳴らすもあり、中には鹽を掴むて庭に蒔散らす彌次馬もある。主婦は燧石を取出して、清淨の火と言つて、かち／＼音をさせて騒いだ。

哀憐、恐怖、千々の思は烈しく丑松の胸中を往來した。病院から追はれ、下宿から追はれ、其殘酷な待遇と恥辱とをうけて、黙つて昇がれて行く彼の大盡の運命を考へると、囃籠の中の人は悲慨の血涙に噎んだであらう。大日向の運命は聽てすべての穢多の運命である。思へば他事では無い。長野の師範校時代から、この飯山に奉職の身となつたまで、よくまあ自分は平氣の平左で、普通の人と同じや

## 破

うな量見て、危いとも恐しいとも思はずに通り返して来たものだ。斯うなると胸に浮ぶは父のことである。父といふのは今、牧夫をして、烏帽子が嶽の麓に牛を飼つて、隠者のやうな寂しい生涯を送つて居る。丑松はその西乃入牧場を思出した。その牧場の番小屋を思出した。

『阿爺さん、阿爺さん。』

と口の中で呼んで、自分の部屋をあちこちあちこちと歩いて見た。不圖父の言葉を出した。

## 戒

はじめて丑松が親の膝下を離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるといふ風で、さまざまの物語をして聞かせたのであつた。其時だ——一族の祖先のことも言ひ聞かせたのは。東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のやうに、朝鮮人、支那人、露西亞人、または名も知らない島々から漂着したり歸化したりした異邦人の末とは違ひ、その血統は古の武士の落人から傳つたもの、貧苦こそすれ、罪惡